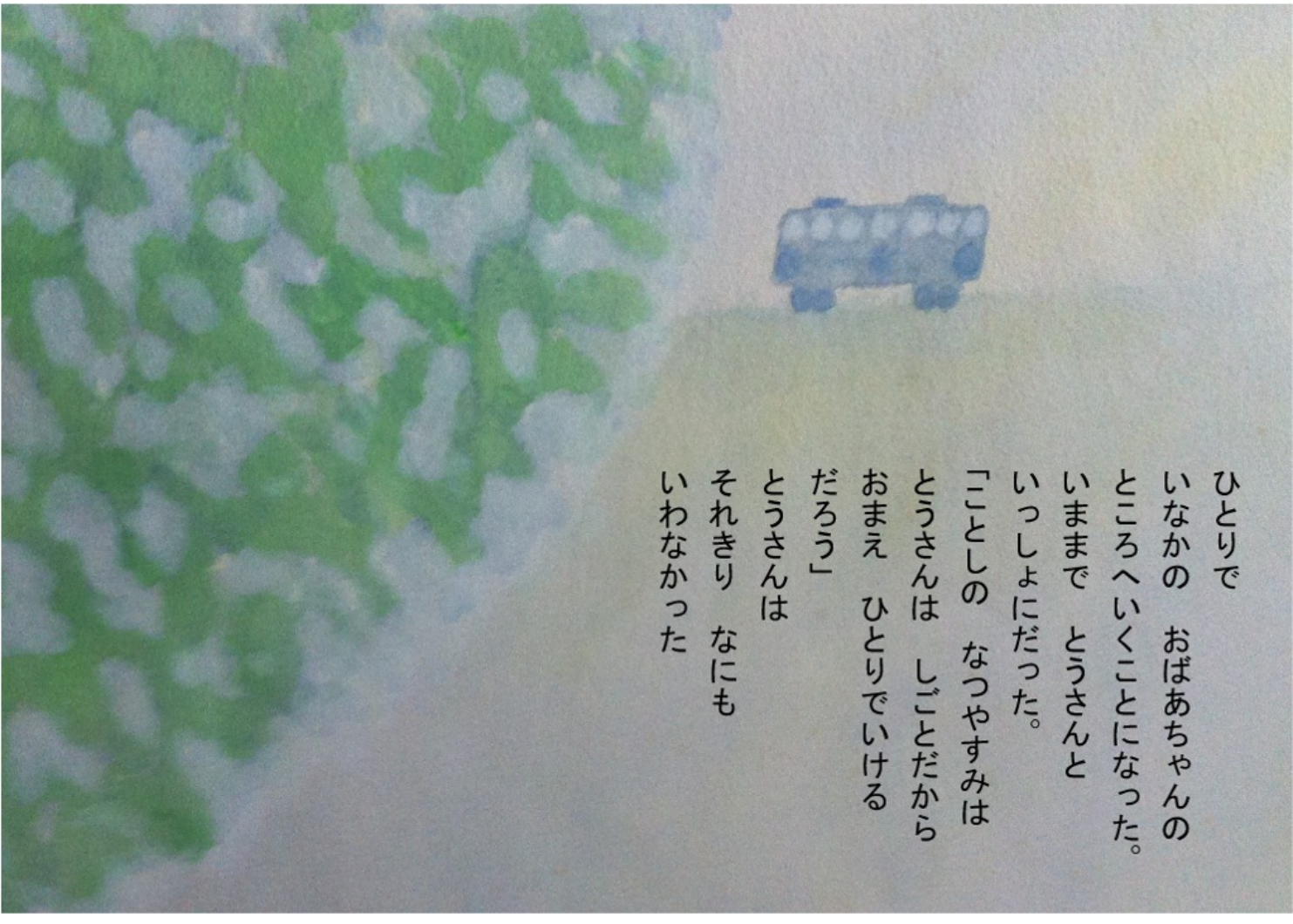
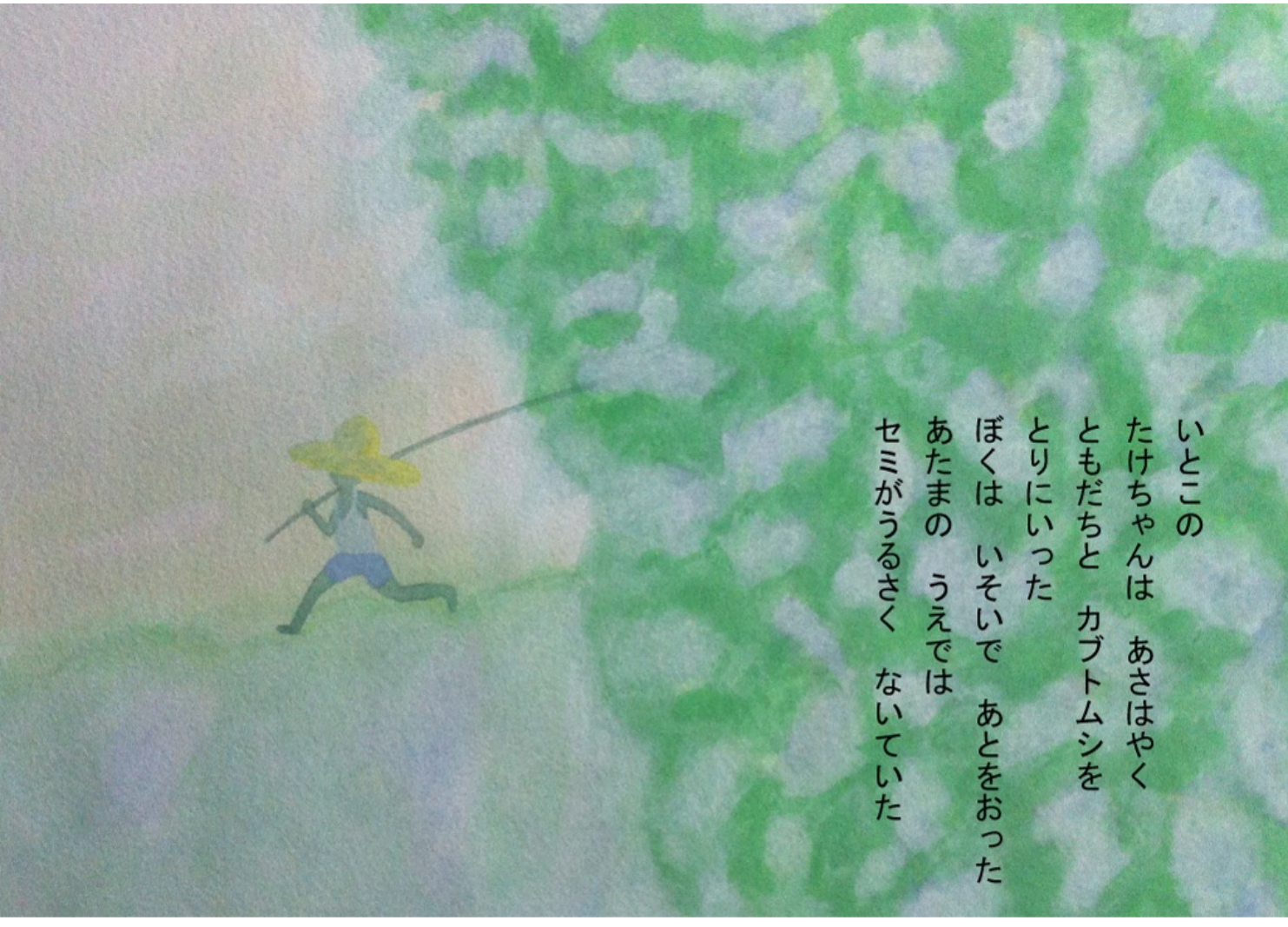
カブトムシのおくりもの

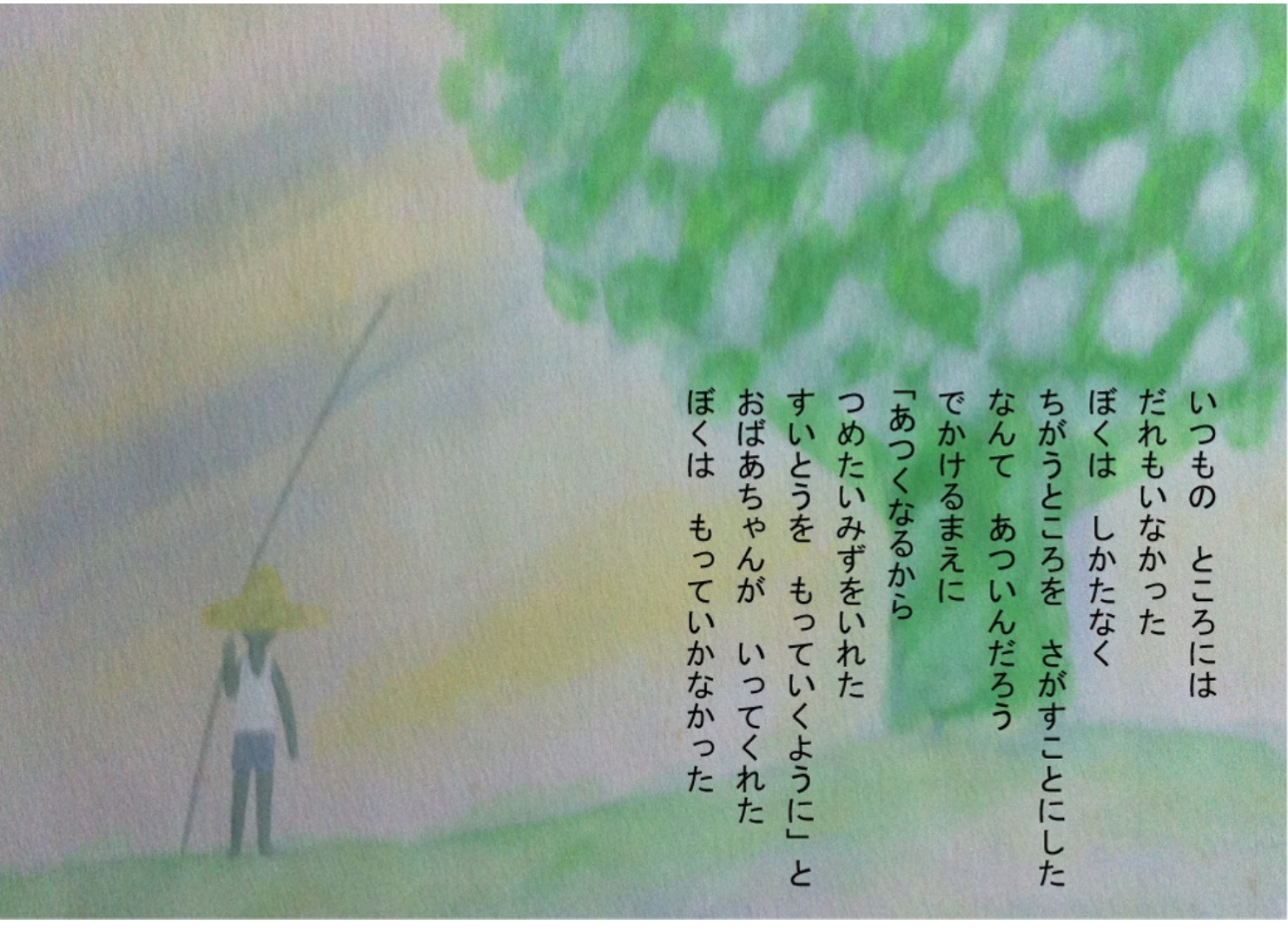
ヨネダ ミキ



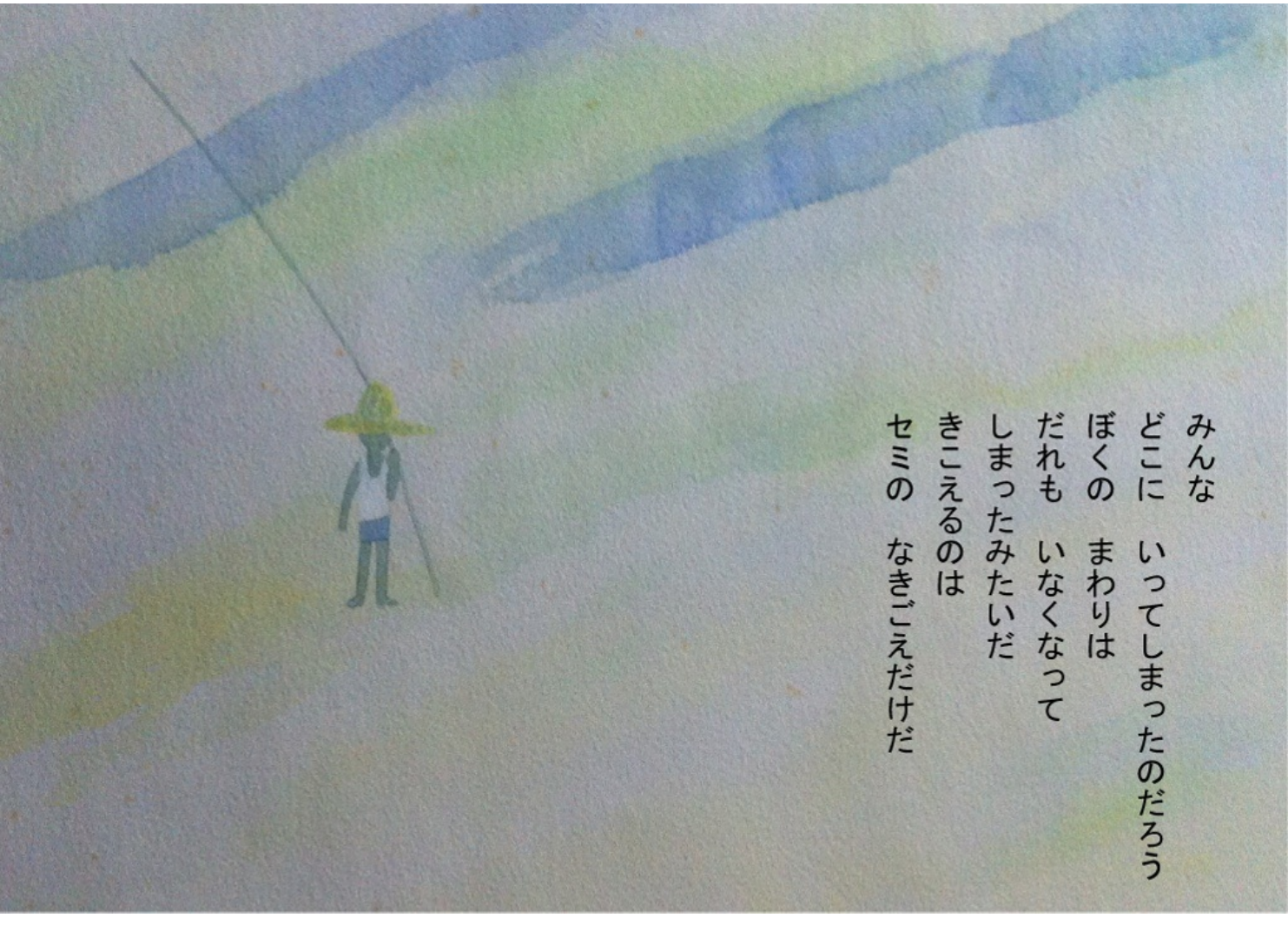
ひとりで
いなかの　おばあちゃんの
ところへいくことになった。
いままで　とうさんと
いっしょにだった。
「ことしの　なつやすみは
とうさんは　しごとだから
おまえ　ひとりでいける
だろう」
とうさんは
それきり　なにも
いわなかった



いとこの
たけちゃんは　あさはやく
ともだちと　カブトムシを
とりにいった
ぼくは　いそいで　あとをおった
あたまの　うえでは
セミがうるさく　ないていた



いつもの　ところには
だれもいなかった
ぼくは　しかたなく
ちがうところを　さがすことにした
なんて　あついんだろう
でかけるまえに
「あつくなるから
つめたいみずをいれた
すいとうを　もっていくように」と
おばあちゃんが　いってくれた
ぼくは　もっていかなかった


みんな
どこに　いってしまったのだろう
ぼくの　まわりは
だれも　いなくなって
しまったみたいだ
きこえるのは
セミの　なきごえだけだ

眠ってしまった

あついひ
たけちゃんと
ザリガニを
とりにいった
おおきなやつ
ちいさなやつ
ひがくれるまで
たくさん
とった

あついひ
たけちゃんと
きのうえで
ねぐらを　つくり
ぼくらの
ひみつのばしょにした
そのまま
よるまで
ねむってしまった

あついひ
たけちゃんと
むしを
とりにいつた
セミ　クワガタ　トノサマバッタ
だけど　カブトムシだけは
とれなかつた

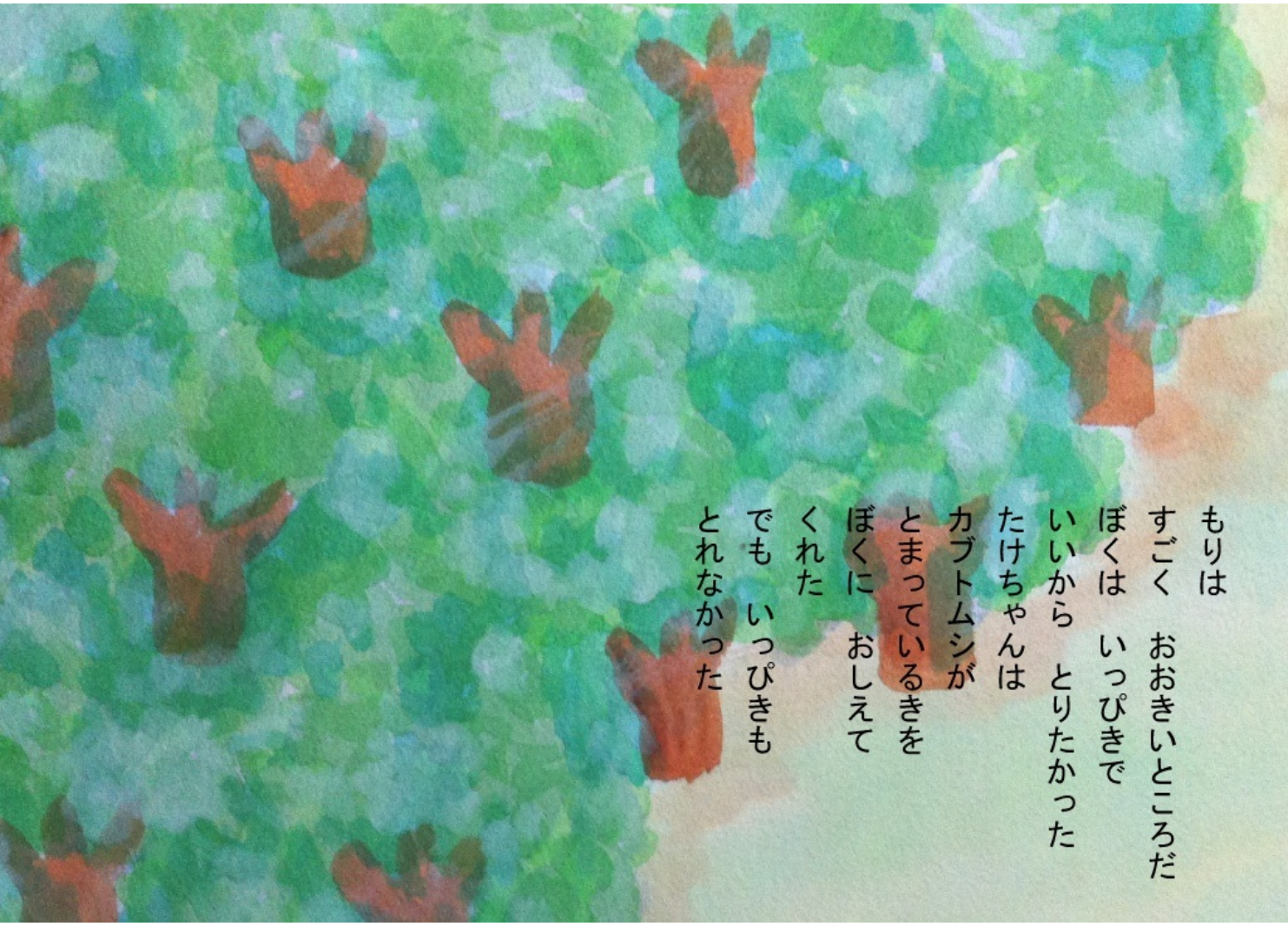
あついひ
たけちゃんと
トンボを
とりにいった
ギンヤンマ　オニヤンマ
ぼくの　すきな
トンボは
いっぴきも
とれなかった

「おーい」
ぼくは
たけちゃんの　こえで　おきだした
カゴを　みると　たくさんの
むしが　はいっている
どこで　とって
きたのだろう

たけちゃんは
カゴのむしを
ぼくに
みせてくれた

カゴのむしを
いっぴきとりだし
それは　いままで
みたことない
おおきな
カブトムシだった
ぼくは　ちいさくて
いいから　ほしかった

「これから
カブトムシを
とりにいくんだ
そこは　ぼくらの
ひみつの　もりなんだ」
ぼくは　ワクワク
しながら　ついていった
はじめて　いくところ
だから　たくさん
いるだろう



もりは
すごく　おおきいところだ
ぼくは　いっぴきで
いいから　とりたかった
たけちゃんは
カブトムシが
とまっているきを
ぼくに　おしえて
くれた
でも　いっぴきも
とれなかった

なつやすみも
そろそろ　おわりになり
かえることになった
たけちゃんが
バスていまで
みおくってくれた
だいじにしていた
あのカブトムシを
ぼくに　くれた

ぼくらだけの
ひみつの
もりを　みつけた
つぎに
くるときは
もう　ひとりでも
だいじょうぶだ

カブトムシのおくりもの

http://p.booklog.jp/book/101759

著者：ヨネダ　ミキ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/s27/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/101759

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/101759

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ